

育成を目指す資質・能力の 明確化と共有を土台とした 3つの教育課題に取り組む 3校の実践

大学入学者選抜改革の内容が具体化し、「思考力・判断力・表現力等の育成」
「英語4技能の育成と評価」「多面的評価」への対応が大きな鍵になることが分かってきた。

2018年度の高校1年生には、
3年後の大学入試に向けて今からどのような指導をしていくことが必要なのか。
3つの教育課題に既に着手した3校の実践からそのヒントを探る。

事例 1

茨城県立 下妻第一高校



◎教育方針に「文武不岐・人間力を磨く」を掲げ、文(学習)と武(部活動)を分けず一体となって優れた人格形成を目指す。2016年度から、茨城県教育委員会「一人一人が輝く活力ある学校づくり推進事業」の重点校。

◎設立 1897(明治30)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、茨城大、筑波大、東京大、東京工業大などに121人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ588人が合格。

◎URL <http://www.shimotsuma1-h.ibk.ed.jp>

事例 2

長野県 上田高校



◎スクール・アイデンティティーに「試百難(困難から逃げない、周到な準備をする、最後まで粘り抜く)」を掲げる。上田藩主居館跡地にあり、門・堀・濠は市の文化財。2015年度から文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定校。

◎設立 1900(明治33)年

◎形態 全日制・定時制/普通科/共学

◎生徒数 全入学定員約360人

◎2017年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、東京大、東京外国語大、東京藝術大、信州大、大阪大などに192人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ558人が合格。

◎URL <http://www.nagano-c.ed.jp/ueda-hs/>

事例 3

京都府・私立 京都産業大学附属 中学校・高校



◎教育目標は「豊かな教養と、全人類の平和と幸福のために寄与する精神を持った人間の育成」。特進コース、進学コース(文理・KSU)を設置。国語教育、英語教育など、6つの重点教育を設け、次代を切り拓く力の育成を図っている。

◎設立 2007(平成19)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約380人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、京都市大、大阪大、神戸大、九州大、京都府立大などに52人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、京都産業大、同社大、立命館大などに延べ631人が合格。

◎URL <http://www.jsh.kyoto-su.ac.jp/>

長野県上田高校

自校の教育のあり方を明確にした上で
教育活動を見直し、学校改革に取り組む

長野県上田高校は、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定を追い風に、学校として目指すものを明確にし、教育活動全体を見直した。その方向性が高大接続改革に合致していると確信したことで、教師は自信を持って新たな大学入試を見据えた学校改革に取り組んでいる。

2018年度に向けた全体方針

自校が進むべき先を見据え、
教育活動全体を再構築

長野県上田高校は、地域の進学校拠点校として最難関大学進学者を安定して送り出してきた。その同校が社会の変化を踏まえた学校改革に取り組み始めて間もない2015年度、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」(以下、SGH)に指定された。内堀繁利校長は次のように説明する。

「これからの時代を見据え、改革を進めようとしていた時に、SGHの指定を受けました。そこで、SGHを含めた教育活動全体の再構築を目指し、『本校の使命とは』『どの方向に進むべきか』『地域で果たすべ

き役割は何か』などの観点から、教師全員で議論しました」

15年度に教務主任が中心になって行っていた議論を活性化させるため、16年度から各分掌・学年の代表や管理職から成る「ビジョン委員会」で検討。職員会議後、1年間で15回ほど、授業改善や進路指導など毎回異なるテーマで話し合い、その結果を次の職員会議で投げかけて教師全員で議論するということを繰り返し返した。廣田昌彦教頭はこう振り返る。

「初めのうちは個別の教育活動の話が中心でしたが、次第に学校として進むべき方向性が見え、その中で各教育活動をどのように機能させるかという議論に発展しました」

そうした議論が徐々にまとまる頃を見計らって、内堀校長が論点を整

理し、「本物の学力」「感性」「想い・志」「文武両道・自学自習と気概」の4つを教育活動全体で育むという方向を示す「上田高校の教育が目指すもの」にまとめた(図)。

その教育目標・方針が浸透するにつれ、各分掌・学年から新たな提案が次々と上がるようになった。また、この図を学校のホームページに掲載するとともに、PTA総会や学校評議委員会、中学生の体験入学などでも発信し、外部から意見を求め、常に見直しを行っている。

組織的な学校改革が円滑に推進されている要因として、その方向性が高大接続改革の目指すところとほぼ合致している点も大きいという。

「本校の先生方は、生徒が大学や社会で活躍するために、高校でどう



長野県上田高校校長
内堀繁利 うちほりしげとし
教職歴38年。同校に赴任して3年目。



長野県上田高校教頭
廣田昌彦 ひろたまさひこ
教職歴31年。同校に赴任して2年目。



長野県上田高校
菊池文明 きくちふみあき
教職歴30年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



長野県上田高校
福井克実 ふくいかつみ
教職歴35年。同校に赴任して6年目。スーパーグローバルハイスクールチームリーダー。



長野県上田高校
竹内光礼 たけうちみつり
教職歴32年。同校に赴任して7年目。2学年主任。英語科。

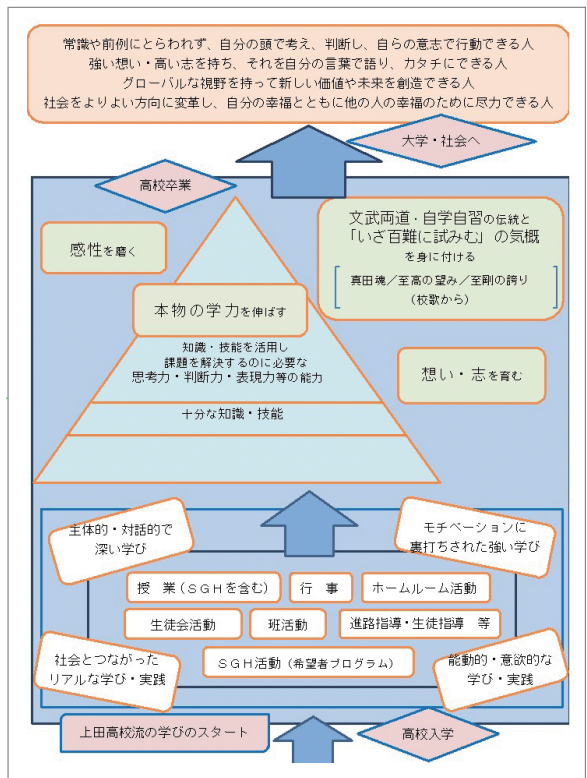


長野県上田高校
山田翔輝 やまだしゅうき
教職歴5年。同校に赴任して6年目。学習指導係長。理科。

いった資質・能力を育てるべきかを最も重視しています。その方向性が高大接続改革と共通するため、『本来目指すべき教育を通して、生徒の希望進路も実現させられる』と捉え、自信を持って取り組んでいます(内堀校長)

*プロフィールは2018年3月時点のものです

図 「上田高校の教育が目指すもの」(ver.2)



*学校資料をそのまま掲載

1 思考力・判断力・表現力等の育成への対応

全教科・科目が同じ方向性でアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を推進

難関国公立大学志望者が多い同校では、以前から思考力・判断力・表現力等の育成に努めてきた。ここ数年はアクティブ・ラーニング(以下、AL)やICTを導入した授業を推進。17年度からは、前・後期に各1週間行っていた互見授業週間を全教科の研究授業週間とし、互見授業は通年の実施とした。

改善を促進している。例えば、理科担当で学習指導係長の山田翔輝先生は、英語の授業で生徒が起立してペアで音読し、終わった順に座るという活動を見て、自身の授業に、個々の考察後にペアで説明し合う活動を取り入れた。

「生徒が考えをアウトプットすることで、思考力や表現力の育成につながる」とともに、それらの力の程度

や理解度が可視化され、評価しやすくなりました」(山田先生)

見学者は授業後、シートにコメントを記入し、授業者に手渡しして意見交換をする。今後は、授業者・見学者の双方が互見授業をより効果的に授業改善に生かせるよう、見学時の観点を絞るなどの工夫をする考えだ。

定期考査のあり方も、記述力のさらなる育成を念頭に見直し、17年度から全教科で1問は論述問題を出出とした。出題の半数を論述形式とする教科もあり、多くの生徒が記述に抵抗感がない。山田先生は以前から定期考査で論述問題の比率を高くしてきたが、卒業生から「先生の授業やテストで書くことには慣れていたので、大学のレポート作成が楽に感じた」と言われたことが自信になっているという。また、定期考査の問題は校内LANで共有し、授業と同様、同じ方向性で改革を進めている。

思考力・判断力・表現力等の育成においては、SGHの活動の効果も大きい。同校は、公立普通高校型SGHのモデルとして、課題研究を中心とした生徒全員参加型カリキュラムを行っている。生徒は各自の関心や希望進路を踏まえて12のカテゴリ

リーの中から1つを選んで課題を設定し、大学などからの指導を受けながら研究。2年次の終わりに研究成果を発表する。2年生全員が参加する台湾研修では、調査実習や現地高校で発表を行うほか、選抜制で、フィリピン(1年次)とアメリカ・ボストン(2年次)での研修を実施する。それらの海外研修を機に大きく伸びる生徒が少なくないと、SGHチームリーダーの福井克実先生は語る。

「帰国後、多くの生徒が校外での活動に積極的になります。例えば、フィリピンで貧困問題に取り組むNPOの活動に参加した生徒は、帰国後、フィリピンの現状を広めようと情報を発信するとともに、募金活動を始めました。さらに、問題解決には知識が必要だと、授業でも意欲的に学ぶようになり、大学での目標も明確になりました。そうした主体的な活動が、思考力や表現力の向上につながっていると感じます」

17年度には1・2年生全員がベネッセの「GPS-Academic」(*)を受検し、SGHの活動との相関を分析。その結果、特にフィリピンやボストンの研修の参加者は、協働的思考力が高まったことが分かった。

*1 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

「協働学習や研究発表など、課題研究で効果的だった学びの要素は、

教科指導に積極的に取り入れ、授業改善に生かしています」(廣田教頭)

2

英語4技能の育成と評価への対応

英語4技能を総合的に伸ばすよう活動を工夫し、その成果を民間の資格・検定試験で継続的に測定

英語の授業では、リスニング・リーディング・ライティングの3技能とともに、スピーキングの育成も強化しようとして、4技能を統合した活動を取り入れている。例えば、全体で音読後、その要点を英語で説明し合うペアワークをして、個々にその内容を英文で書く。その英文をグループで回し読みし、感想を英語で伝え合うといった活動だ。活動をテンポよく展開し、英語4技能とともに思考力などの育成にも結びつけたいと考えている。さらに、オンラインの英会話レッスンにも注目していると、英語科の竹内光先生は言う。

「17年度、試験的にベネッセの『Online Speaking Training』(※2)を導入したところ、多くの生徒が講師と積極的に話し、『もっと続けたい』といった声が上がりました。英語が不得意な生徒も講師にリードさ

れ、前向きに学ぶ姿が印象的でした」

1・2年生全員が3技能を受検してきたベネッセの「GTEC」は、18年度はスピーキングを加えた4技能を受検する予定だ。

「GTECは実践的な英語力を測れる上に、WPM(※3)が算出されることも指導に役立っています。生徒には、『センター試験に対応するにはWPM120語が目標』と伝えていきます。『大学入学共通テスト』になると、さらにスピードが求められると考えています」(竹内先生)

英語力を継続的に測るツールとしてだけでなく、受検自体を学習機会の一つとしてGTECを活用している同校だが、17年度の1・2年生では、16年度の同学年よりもグレード5(※4)以上の上位層が大幅に増加、グレード3以下の下位層は減少と、活動中心の授業の成果が見られた。

3

多面的評価への対応

ポートフォリオの充実を図るとともに、進路指導のあり方も見直す

これまでは、主にSGHにおける活動について、年3回、アンケート形式で学習過程を振り返る自己評価や、2年次の学年末に課題研究を通して学んだことや今後のビジョンをまとめた「学びの報告書」などを、ポートフォリオとして蓄積してきた。

「SGHの活動で得た多様な経験を振り返り、自分はどういう成長を遂げたのかを考えて、他者に伝えるようにまとめる指導に力を入れてきました」(福井先生)

そのような過程を通して、生徒は自身の成長を自覚していくと、廣田教頭は言う。

「1年次の自分と比べて、どの経験を通して、自分の何が成長したのかを認識させることが、次の学びにつながるしていきます。そうした自覚を十分に得ることが、結果的に大学入試などで自分自身を語る力にもつながります」

現在、SGHにおける多面的評価

を他教科に広げていく手法を模索している。また、ポートフォリオを充実させることで、進路指導のあり方も捉え直す必要があると、進路指導主事の菊池文明先生は語る。

「ポートフォリオで学びの履歴を蓄積するとともに、教育活動全体で表現力を育むことで、生徒がアピールできることは広がります。大学入試がますます多様化する中で、AO・推薦入試も視野に入れ、これまで以上に個々の希望や適性に応じた進路指導を展開しようと考えています」

そうした改革の方向性を変えることなく、新たな大学入試を受験することになる新1年生を迎え入れる。

「単発的な取り組みを性急に取入れるのではなく、本来目指すべき教育のビジョンを十分に議論し、それぞれの先生が何をすべきかを考えて対応する。それが回り道のように見えて、結局は一番の近道なのだろうと思います」(内堀校長)

※2 ベネッセが提供するサービスの1つ。Skypeを活用したオンラインでのマンツーマンのプログラムで、主に中学・高校生を対象に、学習指導要領に沿って開発された教材でレッスンをを行う。CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)に基づき、レベルに応じて約120のコンテンツを用意。 ※3 words per minuteの略。1分間で読むことができる語数のこと。 ※4 グレードは1~7まであり、グレード5は高校卒業時の目安となる。